

月例研究会（2022年4月27日）

## 大阪の損保労働者の 演劇運動と上演作品

長島 祐基

本報告では戦後大阪の損保労働者の演劇運動（労働者が劇を創り、上演する活動）で上演された4つの作品（『廃家』『特異家族』『零余子』『和子との対話』）を中心として、①戦前的な「家」の変化の経験とその表現、②演劇運動の経験が男性労働者の女性労働者への見方や家族観に与えた影響、③高度成長の中での表現の変化を検討した。「家」の問題は労働文化運動をジェンダーの視点から捉える際の重要な論点である。また、演劇運動において戯曲の書き手や演出を務めたのは主に男性だが、演劇は男性と女性が協力して作品を上演する活動である。従って男性の意識変化も重要な論点となる。

1950年代の大阪の演劇運動では全損保大阪地協演劇部が「家」の問題を描いた作品を上演した。その要因としては以下の点があげられる。第一に戦争中、女性が出征した男性に代わり「家」を支えていたという原体験が労働者の中にあった。第二に多くの女性が職場や演劇部にいる中で「家」の問題（家族の反対）は女性労働者のサークル活動参加を阻む要因だった。第三に演劇部の労働者達は異なる会社に勤めており、大家族出身者が多かった。そうした中で「家」の問題は異なる会社に属する労働者が劇を作る際の共通の土台であった。

演劇運動やその背景にある労働運動を通じて、男性達も労働者として女性が「自立」することの重要性を認識していった。演劇部の中からは共働きを「認め」たり、労働組合の手が届

きにくかった託児所／保育所の設置運動に加わる男性労働者もあらわれた。

上演作品の中では、戦後の社会変化や家長の死を通じた戦前的な「家」の解体が描かれ、「家」の解体を背景として若手の家族成員が「自立」していった。一作目の『廃家』と比べて二作目の『特異家族』では「家」の背後にある社会の問題が描かれるなど、進歩がみられた。ただし、作品の中で描かれた今後の家族像は一つの可能性／示唆として描かれるにとどまっていた。

1960年代に入り、損保の演劇サークルや労働運動で「家」の問題に代わる問題となったのが、職場の合理化を進める資本との対決であり、その中で発生した女性労働者（タイピスト）の職業病（腱鞘炎など）であった。全損保大阪地協演劇部は職場の締め付けなどを背景に金融演劇サークルと合同して劇団大阪を結成（1972年）し、職場の問題を描いた作品を上演した。劇団大阪は結成直後に、共働きの難しさを描いた『零余子』と労働組合の分裂や女性労働者の職業病を描いた『和子との対話』を上演した。二つの作品は高度成長や合理化、競争の激化の中で女性が働き続けることや家族形成の困難さを描いた作品であった。

以上のように演劇運動は労働者自身が「家」や家族の問題を表現する場であり、「家」が描かれる背景には職場の女性労働者が置かれた環境があった。作品のテーマは戦後の民主化や労働運動の中で戦前的な「家」の解体と女性の「自立」、新しい家族形成への希望から出発したが、高度成長にともなう合理化を経て、共働きや家族形成の困難さが描かれるようになった。それは当時の労働者自身が職場やサークル活動を通じて直面した課題でもあった。

（ながしま・ゆうき 法政大学大原社会問題研究所 兼任研究員）